カナダの首相 ❸ ウィルフリッド・ローリエ
(1896—1911)

〝20世紀はカナダの世紀〟

ヨーク大学教授　ジョン・セイウェル

「私の目的は、連邦の強化にある。これまで長い間たがいに疎遠であった各グループをまとめ、ひとつの国民に育て上げること——これは至上目的であって、他の問題はすべてこの目的に従属する。」

統一こそわが使命

この言葉は、政治家の空疎なレトリックではない。カナダの八代目首相サー・ウィルフリッド・ローリエが、生涯その指針とした信条を述べたものである。初代首相マクドナルドがカナダに〝肉体〟を与えたのだとすれば、ローリエはその〝魂〟を見つけようとした。自由党の党首を三十二年間、首相を十五年間つとめたローリエは、人種、宗教、地域による分裂に直面しながら、カナダの統一を保つ鍵を探し続けた。時代はカナダが植民地から独立国へと移行していくなかで、対英関係をめぐって国論が割れているときである。

ローリエは、国内統一の任務を遂行するのには最適任者だった。英仏両語に堪能で、英仏どちらの文化にも同じように精通している点では、後のピエール・トルドーと双璧をなしている。モントリオール近在のフランス系測量技師の息子として生まれた彼は、少年の頃、イギリス系の家にあずけられて英語とイギリス系の生活習慣を身につけ、のちにマッギル大学でイギリスの法律、政治理論、歴史を学んだ。

政界に入ったのは、一八七一年、三十歳のとき、ケベック州の州議会に自由党から立候補して当選したのが最初である。三年後に連邦下院に入り、終生下院議員の座を保った。

一八七〇年代は、ケベックの自由党員にとって暗い未来を予見させた。リベラリストにはほとんど共和主義に近い急進派もおり、自由党はカトリック教会からの執拗な批判や攻撃の真只中にあった。ケベックの僧侶たちは、リベラリズムはキリスト教社会につけ入る悪であると喧伝し、自由党支持者には洗礼や終油を拒んだりした。

政治は宗教から自由

ローリエは、当時まだ一介の自由党員だったが、こうした頑迷固陋な教会権力に対して敢然と闘いをいどんだ。政治は宗教から自由でなければならない。もし政党が他宗派の存在を認めなければ、さまざまな民族からなるカナダはたちまち宗教戦争に陥ってしまうではないか。

一八七七年にローリエが放った自由主義についての演説は、教会を真っ向から批判し、一大センセーションをまき起こした。聖職者たちは激高したが、結局ローマ法王が政治介入禁止命令を出し、事態は収まった。ローリエは今や自由主義の若きスターであった。一八八七年、彼はエドワード・ブレークの後を継いで自由党党首となる。

一八九一年の選挙で、無制限の対米互恵主義を問うた自由党が負けると、ローリエは自由貿易主義をすて、保護貿易を受け入れた。この結果、産業界の自由党支持が増え、また、ケベック保守党の内紛で穏健派が自由党に鞍替えした。大半の州で自由党が強力な政権をうち立てていたことも、中央での勢力に大きな影響を与えた。

しかしマニトバ学校問題（マニトバ州が一八九〇年、カトリックによる分離学校を廃止し、宗派に関係のない単一の公的学校制度を樹立する法律を制定したことから起きた対立抗争）では、自由党も保守党と同様に分裂の危険にさらされた。ローリエはこの問題について長い間、方針を明らかにせず、事態を見守った。一八九五年になってようやく、イソップ寓話の北風と太陽にならって「私なら太陽のやり方をとる」と表明した。中央の強権行使によってではなく、教育に対する州権を認めた上で、州と話し合いをする方式を選んだのである。翌年の選挙で、太陽方式を掲げた自由党は各州で保守党を破り、心配されたケベック州でも勝利をかち取った。

フランス系最初の首相が、こうして誕生した。

フランス系最初の首相

ローリエは、マクドナルドと同様、断固としたワンマンであったが、人に好かれる天性を持ち合わせていた。優雅な話し方、格調高い演説、筋の通った議論、人を動かす理想——ローリエはまさに天